

史跡讚岐国分尼寺跡

(11次調査)

現地説明会資料



平成23年6月4日(土)

高松市教育委員会

史跡讃岐国分尼寺跡の あゆみ

国分尼寺は正式には「法華滅罪之寺」といい、奈良時代に聖武天皇の勅命によって全国 60 余箇所に国分寺とともに建立された国営の寺院（官寺）です。国分寺とあわせて国分二寺と呼ばれています。

讃岐国分尼寺跡は、特別史跡讃岐国分寺跡の北東約 2 km の位置に所在し、昭和 3 年に国の史跡に指定されています。

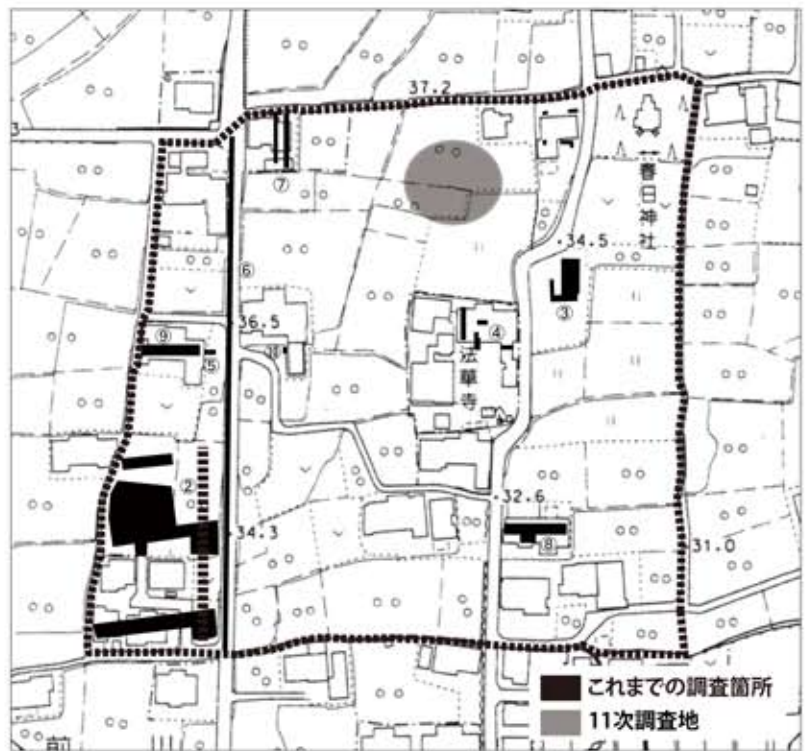
現法華寺境内には巨大な礎石が 10 数個残っており、金堂跡と推定されています。

また、昭和 57 年には香川県教育委員会によって発掘調査が実施され、寺域を区画すると推定される南北方向にのびる幅 2 m の溝が確認されました。その結果、法華寺を中心に寺域の東西幅はおおよそ 1 町半になることが推定されています。

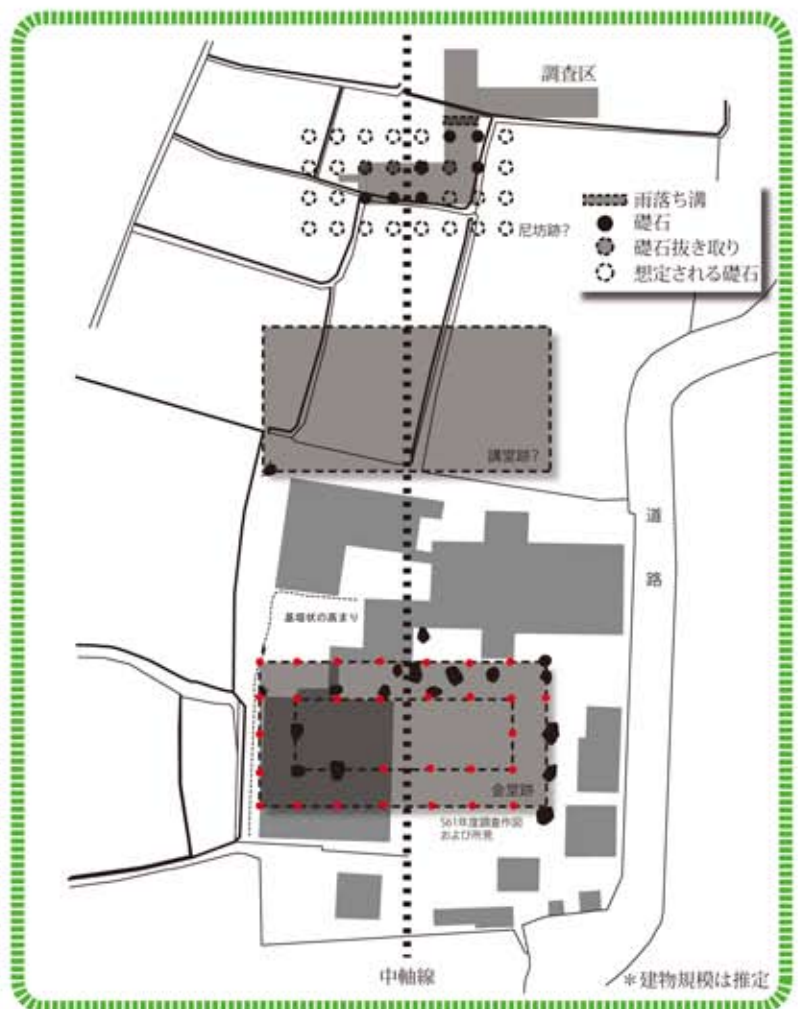
しかし、これ以外には具体的な手掛かりは掴めておらず、讃岐国分尼寺の寺院規模や伽藍配置は未だよく分かっていませんでした。

本市教育委員会でも、平成 18 年度より史跡讃岐国分尼寺跡において確認調査を実施しておりますが、具体的な寺院規模や伽藍配置を知ることの手掛かりを得るには至っていません。

このような経緯の中で、今年度の調査（11 次）は、法華寺北側に位置し、礎石と推定される大型の石材が点在する箇所において実施することにしました。



史跡讃岐国分尼寺跡の史跡範囲と調査位置図
(囲っている破線が史跡範囲、丸数字は既往調査位置)



法華寺周辺の礎石の位置 (S=1/750)



調査成果

調査の結果、農地の畦畔に露出していた巨大な石は礎石であることが確定し、現状で、南北2間（3列）、東西4間（5列）の礎石列を確認することができました。

また、調査区の最北に位置する東西方向の礎石列北側に平行する溝が確認され、建物北側に設けられた雨落ち溝と推定されます。この溝からは創建期の軒丸瓦等が出土しました。

この建物の東側は既に大きく改変を受けており、建物の東限を確認することはできませんでした。しかし、通常、寺院建物は伽藍の中軸線に左右対称に展開することが一般的です。そのため、今後の調査で建物の西端が確認できれば、本来の建物規模が明らかになるものと考えられます。

以上の調査成果と金堂跡（現法華寺）との位置関係から、見つかった礎石列は尼坊の礎石建物跡と推定されます。これは、讃岐国分尼寺跡の構造を知る上で、大きな成果といえます。

この他に、尼寺跡は10世紀で寺院としての機能が失われていたと推定されていましたが、今回の調査では、平安時代末（11世紀後半～12世紀）の瓦も出土しており、今後の検討が必要ですが、想定されているよりも長い期間、修理などの維持管理が行われていたと考えられます。



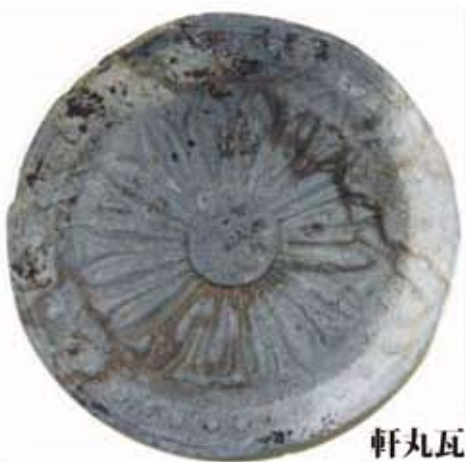
畦畔から突き出た礎石



礎石



礎石列と雨落ち溝



軒丸瓦



軒丸瓦の出土状況

創建後の讃岐国分尼寺



創建後の讃岐国分尼寺の変遷はよく分かっていませんが、菅原道真が讃岐国府に在任中には讃岐国分尼寺の境内に白く美しい牡丹が咲き誇っていた様子を「法華寺白牡丹」（『管家文草』）の漢詩として詠んでいます。現在でも境内では美しい白牡丹の花をみることができます。

中世以降の様子はさらによくわかりませんが、近世初期には小堂のみであったことが、国分寺末寺帳からうかがい知ることができます。

また、『讃岐国名所図会』（1854（寛永7）年）には、江戸時代における讃岐国分尼寺跡（法華寺跡）の様子が描かれています。残念ながら今回の調査区に当たる部分は描かれていませんが、それによれば、門や金堂跡と考えられる礎石や、お堂、春日社（現存）が描かれており、往時の名残をとどめていたことを知ることができます。絵図の中には「境内も8町ばかりありて、塔美麗の大伽藍なりとぞ。天正年中失火に灰燼となりけり」と書かれています。

現在の観音堂は高松藩主松平頼儀公により、1795（寛政7）年に再建されたものです。この頃は真言宗もしくは天台宗に属していたようですが、1846（弘化3）年に僧諦乗によって真宗寺院として再興されたようです。

【用語解説】

尼坊跡

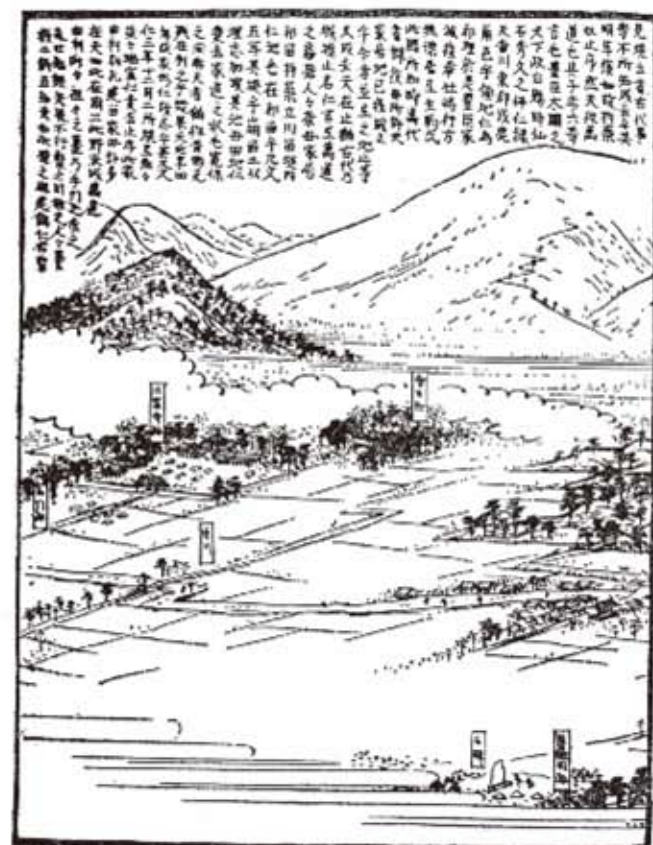
各尼寺には10名の尼が配属されました。この尼さんたちが、仏教の勉強に励んだり、生活したりするための寺院内に設けられた施設が尼坊です。特別史跡讃岐国分寺跡では全国的にも有名な大規模な僧坊跡が発見され、現在、現地で公開されています。他地域では、僧坊や尼坊は掘立柱建物の事例がありますが、讃岐の場合は二寺ともに立派な礎石建物であることがわかりました。

礎石建物

古代寺院や古代の役所の建物に用いられる建物の建て方で、重い瓦葺きの屋根を支える柱の沈下防止のために巨大な石材を柱の足元に設置した建物。法華寺境内にも当時の礎石が残されています。

雨落ち溝

屋根に降った雨水を受け止め排水するための施設で、建物の周囲に設けられていました。



讃岐国名勝図会（角川書店 1981『日本名所風俗図会』14 四国の巻より）